

へんしん まあくん

あるひまあくんは、こうえんできれいなペンダントを見つけました。まんなかにおおきなあかいいし、まわりはなないろにひかる、ちいさないしでかざられていました。

「なんてきれいなペンダントだろう。」

まあくんが、まんなかのあかいいしにさわると

「ワァー。」

とつぜんまあくんのからだは、まっかなひかりにつつまれて、みえなくなっ
てしまいました。

おおきなアリが、まあくんのかおをじっとみえています。

「きみ、どこからきたの？むこうに、おいしそうなおかしがあるんだ。いっ
しょにとりにいこうよ。」

と、そのアリがはなしかけてきました。

「なんで？うそだろ。ぼく、アリにへんしんしてる。」

「はやくいこうよ。なくなっちゃうから。」

まあくんアリは、なにもわからないまま、そのアリについていきました。

「きをつけろ！にんげんのこどもがいるぞ。つかまるなよ。」

「にんげんって、こんなにおおきいんだ。」

とつぜん、こどものてがまあくんアリのほうにのびてきてました。

「なにするんだ。」

「はなせ！」

いくらいっても、
こどもにはきこえま
せん。



「アリをつかまえたよ。ぼくたちのつくったかわで、およがせようよ。」

まあくんアリは、こどもたちがつくったすなばのかわのなかにいれられてしまいました。

「たすけて！おぼれるよ！いきができないよ！」

まあくんアリが、くるしくてむちゅうでペンダントをにぎると、まっかなひかりにつつまれました。

まあくんは、くらいつちのなかでめをさましました。

「なにをぐずぐずしているんだよ。なんねんもまったんだぞ。はやくそとにでろよ。」

うしろからだれかが、まあくんをおします。

「なんだよ。いけばいいんだろ。」

まあくんは、つちをかきわけそとにでました。そとのひかりにまあくんのからだはやさしくつつまれました。

めのまえにおおきなきがあり、まあくんは、きをのぼりはじめました。きのうえでやすんでいると、せなかがむずむずしてきて、きているものをぬぎたくてしかたがなくなりました。

「ぼく、いったいどうしたんだろう。」

「なにをいってるんだ。やっと、じゅうにそらをとべるんだ。なんねんもつちのなかでがまんしたんだから、おもいっきりとんでくるよ。」

セミが、まあくんのすぐそばから、そらたかくとんでいくのがみえました。



「ヤッター、そらをとべるぞ！」

なんと、まあくんはセミにへんしんしていたのです。まあくんゼミです。そのとき、しろいあみがまあくんゼミをつかまえました。

「うそだろ。まだ、じゆうにそらをとんでないじゃないか。ひどいよ。」
まあくんゼミは、くやしくておもわずペンダントをにぎりしめると、まっかなひかりにつつまれました。

とてものがかかわくので、まあくんはめをさしました。

「あつい！みずがほしい。」

むちゅうでまわりをみると、かおのすぐそばにあかいものがあります。

「なんだろう？」

トマトです。ミニトマトのあかいみが、まあくんのすぐよこにありました。

「こんどは、ミニトマトにへんしんしたんだ。」

「ぼくたちをそだてているこは、みずをまいにちくれないんだ。」

「のどがかわいて、しかたがないのにいやになるよ。」

ミニトマトたちが、おこっています。



「どうして、まいにちみずをくれないの？」

「ぼくたちのきもちやくるしみが、わからないんだよ。」

「きっと、こんなにくるしんでいるなんて、おもってもいないよ。」

まあくんトマトは、はらがたってみぎやひだりにからだをゆすり、かおを

まっかにしておこりました。おこりすぎてまあくんとマトは、じめんにおちたときに、おもいっきりペンダントをぶつけてしまいました。

まあくんがきがつくと、そばにこわれたペンダントがおちていました。まあくんとマトは、まあくんにもどっていました。

「まあくん。まあくん。」

まあくんをさがしている、おかあさんのやさしいこえが、きこえました。まあくんは、おかあさんとてをつないでいえにかえるとちゅう

「アリはね、ちいさいからだでいっしょうけんめいたべるものをさがすんだよ。セミは、なんねんもくらいつちのなかでくらすんだ。じゅうにそらをとぶひをたのしみにしているんだよ。ミニマトは、まいにちみずをくれるのをまっているんだ。」

「まあくんは、ちいさいいきもののきもちがとてもよくわかるのね。」

おかあさんは、やさしくまあくんのかおをみました。

